

中野健太 著

『108年の幸せな孤独
—キューバ最後の日本人移民、
島津三一郎』

株式会社KADOKAWA
2017年 238ページ



本書は、108歳まで生きたキューバ最後の日系一世である島津三一郎（しまづ・みいちろう）氏の生涯を中心に、キューバに移民した日本人たちとその子孫の人生を、第2次世界大戦前からソ連崩壊後の経済危機の時代まで、キューバの歴史と関連付けて描き出した労作である。

著者はフリーの映像ジャーナリストで、キューバのドキュメンタリーを制作するためにキューバへ留学した。日系人と日系でないキューバ人の両方をよく知り、日系人のルーツを調べるために日本各地でも取材を行っている。

タイトルには「幸せな孤独」とあるが、一読した印象では、いわゆる一般的に幸せな人生とは思えなかった。第2次世界大戦中は、当時のパティスタ政権が米国政府にならって日系人を強制収容所送りにしている。著者が水を向けても、島津氏は収容所時代について話すことを拒んだ。他の日系一世の人々も収容所時代について子どもたちに話さなかったという。日系の人々の苦勞がしのばれた。

いつか日本に帰るため決して現地の女性と結婚せず、農業が軌道に乗ったところでキューバ革命となり、日本に錦を飾る夢もついていたキューバの日系人の人生。革命のよい部分を評価しつつ、淡々としかも勤勉に日々を過ごした108年の生涯は、明治生まれの日本人の実直で昔気質な人生そのものだったような気がする。

「108年の幸せ」というフレーズは、最後のページに掲げられた島津氏108歳の誕生日を報じる現地の新聞記事の見出しから来ている。「生まれた土地から遠く離れ、家族もないが、こんなに長く生きられて幸せだ」と述べた島津氏の発言が記事に引用されている。

日本でキューバの日系人について詳しく読めるのは本書が初めてだろう。これが初めての著作という著者の情熱が伝わってくる。一読をお勧めする。

（山岡加奈子）

後藤政子 著

『キューバ現代史
—革命から対米関係改善まで』

明石書店 2016年 318ページ



近年、キューバでは米国との国交正常化（2015年7月）やカストロ逝去（2016年11月）と大きな出来事が相次いだ。ポスト・カストロ時代を迎えたキューバは、変転する国際情勢のなかで、今後どのようにかじを切っていくのだろうか。その方向性を検討するためには、同国が革命（1959年）から今日まで実施してきた政策の再検証が不可欠である。

本書は、ラテンアメリカ現代史の研究者であり、キューバ関係の著訳書も多い後藤政子氏によるキューバ現代史の最新の解説書である。

1953年のモンガダ兵営襲撃に始まり、1959年に革命軍がハバナに入城し革命が勝利するまでの戦闘の軌跡。1961年の米国によるビッグズ湾侵攻、冷戦下のソ連のキューバ支援、1962年のミサイル危機を経て、ホセ・マルティ主義に基づく理想主義的な社会建設をうたうキューバ革命政府が、マルクス・レーニン主義に基づくソ連型の共産主義体制を導入するに至った経緯。1991年のソ連解体の衝撃の後、経済が困窮するなか、体制の生き残りを賭けてキューバ政府が徐々に進めてきた、国有農場の解体、農産物自由市場の再開、ドル所有の自由化、個人営業の規制緩和、外資の誘致などの経済自由化政策の成果と限界。

筆者は、時代の変遷のなかでキューバ政府がとってきた一連の政策が、いかなる判断に基づいて実施されたものであったのか検証している。同時に、革命体制を維持する限界や矛盾および不十分な制度改革の結果、経済の低迷、不正の横行、頭脳の流出、所得格差の拡大などの問題が深刻化したことを指摘している。

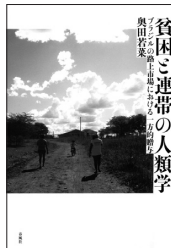
多くの課題を抱えながら、大きく変わろうとしている今日のキューバを理解するために、本書はお勧めの一冊である。

（村井友子）

奥田若菜 著

『貧困と連帯の人類学
—ブラジルの路上市場における一方的
贈与』

春風社 2017年 353ページ



本書は、「社会階層をまたがる連帯の方法を探ることを目的として」、人類学の参与観察や民俗誌的なアプローチにより、ブラジルの都市貧困層をめぐるさまざまな贈与形態を分析する。首都ブラジリア近郊の路上市場を舞台に、ブラジルの貧しい地域である北東部から移住した路上商人たちの「正しい」「間違っただけ」の贈与のあり方が描き出される。そして筆者は、社会の不平等を是正するためにはヨコだけでなくタテでもつながる社会的な連帯が必要だと主張する。

序章で贈与をめぐる概念やブラジルの貧困についての解説がなされ、第一章では「ブラジルの縮図としての首都ブラジリア」が概説されたのち、社会階層により分断された2つの空間、路上商人たちの「正しさ」と「善さ」という2つの規範、および「路上(rua)」と「家(casa)」という2つの領域が提示される。これらの分析ツールをもとに、第二章では路上商人の生活実践や故郷である北東部をめぐる「路上市場の民俗誌」、第三章では労働により「汗をかけたカネ」の「正しさ」と相互扶助により「伸びるカネ」の「善さ」、第四章では「三つの一方的贈与—邪視・ねだり・物乞い」をめぐる事例が検討される。そして、第五章で路上商人たちの事例分析を含めた「一方的贈与論」が論じられ、社会的な「連帯の作法」への期待や重要性が結論として述べられる。

筆者は、長期のフィールドワークを含めブラジルに合計3年滞在した。ただし、筆者が初めてブラジリアを訪問したのが2000年であり、その頃に出会った子どもたちは今や親になっているなど、年月が流れた。また、筆者の研究や「家」をめぐる環境も大きく変化したようである。それらの蓄積された時間や経験をもとに、博士論文に大幅な加筆修正を加えたのが本書である。ブラジリアの貧困地区や北東部に長きにわたって深くかかわった筆者だからこそ、完成させることのできた労作だといえよう。(近田亮平)

工藤律子 著

『マラス—暴力に支配される少年たち』

集英社 2016年 340ページ



中米諸国では近年治安の悪化が著しい。その原因といわれるのが、マラスと呼ばれる貧困地域の若者ギャング団の間の抗争激化と、彼らによる凶悪犯罪の急増である。中米からメキシコや米国へ向かう不法移民のなかには、マラスから逃れるために国を出た貧困層の若者が多いという。長年メキシコのストリートチルドレン問題にかかわってきた著者は、なぜ貧しい若者たちが危険な不法移民の道を選ぶのか、マラスとはどんな連中なのか知りたいという思いから、ホンジュラスを訪れ、NGOネットワークのつてをたどり知り合ったマラスにかかわる人々から話を聞く。本書はその体験をつづったルポルタージュである。

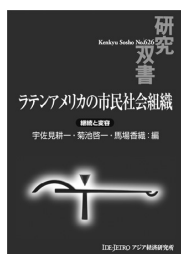
本書にはさまざまな人物が登場する。改心してプロテスタントの伝道師となり、服役者の更生のために刑務所に通う元マラスの大家ボス・アンジェロ、殺人を強要されマラスを抜けることを決意し、メキシコに逃れ運よく難民認定されたホンジュラスの若者アンドレス、貧困層の子どもを支援するNGO組織の代表エルネスト、ギャング問題に取り組む学生ボランティア団体の活動家ジェニファー、貧困地域の教会で若者ギャングの矯正に取り組むアーノルド牧師、若者ギャングを取り締まる警察官たち、等々である。彼らの話から、貧困や家庭崩壊により居場所のないアイデンティティの希薄な貧困層の子どもたちに、マラスが居場所とアイデンティティの拠りどころを提供してきたことが明らかになる。しかし、警察の殲滅作戦、国外麻薬犯罪組織の影響、縄張り争いの激化が、マラスの組織統制強化と凶悪化をもたらし、マラスにかかわれば殺すか殺されるか、逃げるかの選択肢しかないという状況が生まれたという。

ホンジュラスの貧困層の若者がおかれた厳しい現実を伝える迫真のルポルタージュであり、2016年度の開高健ノンフィクション賞を受賞した。

(星野妙子)

宇佐見耕一・菊池啓一・馬場香織 編

『ラテンアメリカの市民社会組織 —継続と変容』



アジア経済研究所
2016年 265ページ

第二次世界大戦前後から1970年代までのラテンアメリカは「国家コーポラティズム」の例として言及されることが多かったが、その後の民主化と新自由主義改革の波を経て、国家と市民社会組織（労働組合・協同組合・コミュニティ組織・宗教集団など）の関係はどのような性格をもつようになっているのだろうか。既存のコーポラティズム論や代表制民主主義論を手掛かりに、現在の国家—市民社会組織関係の特徴を描こうというのが本書の目的である。

本書は「第Ⅰ部 利益媒介・政策形成と市民社会組織」と「第Ⅱ部 民主主義と市民社会組織」の2部構成である。まず序章（宇佐見耕一・菊池啓一・馬場香織）で本書の問題意識の提示とコーポラティズム論・代表制民主主義論のレビューが行われる。つぎに、それらのレビューから導出された課題に基づき、第Ⅰ部ではメキシコの労働法制改革プロセス（第1章、馬場）、ボリビアの鉱業政策決定過程（第2章、岡田勇）、ペルーの政労関係（第3章、村上勇介）が考察され、第Ⅱ部ではベネズエラの参加型民主主義（第4章、坂口安紀）、ブラジルの連邦政府から市民社会組織への財政移転（第5章、菊池）、ブラジルのキリスト教系宗教集団（第6章、近田亮平）についての分析が行われる。そして最後に、終章（宇佐見）で各章の知見がまとめられる。

ブラジル・ポルトアレグレ市の参加型予算の事例をはじめとして、ラテンアメリカの民主化後の市民社会に関する研究は日本語でも数多く存在している。しかしその一方で、同地域の国家—市民社会関係については、いまだに国家コーポラティズム的な解釈が根強い感も否めない。国家と多様な市民社会組織の関係に注目した本書が、我が国におけるラテンアメリカの市民社会のあり方に対する理解の促進につながれば幸いである。（菊池啓一）

清水達也 著

『ラテンアメリカの農業・食料部門の発展 —バリューチェーンの統合』



アジア経済研究所
2017年 200ページ

スーパーマーケットに並ぶラテンアメリカ産農産物の種類が最近増えている。従来からのバナナに加えて、アボカド、ライム、マンゴ、アスパラガスなど青果物や、鶏肉など畜産物も店頭でよくみかけるようになった。本書はこのような農畜産物について、伝統的な供給形態と比較しながら、近年拡大している輸出市場や都市向け供給の担い手である農企業やスーパーマーケットによる供給形態の特徴を分析している。青果物ではペルーの事例をとりあげるほか、鶏肉ではブラジル、メキシコ、ペルーを比較した。これらの担い手は、農畜産物の生産だけでなく、加工や流通など消費までの各段階のつながり（バリューチェーン）を統合することで、生産性や付加価値を高めている点に注目した。

これまでの農産物供給が、できた物売るプロダクトアウトだとすると、農企業やスーパーマーケットは、需要に合わせて供給するマーケットインのアプローチをとっている。そのために、まず顧客に求められる農畜産物の量、質、価格、納期を把握する。そして顧客の需要に合わせて、必要な資材、人材、輸送手段などを手配する。大規模な自社農場では、先進国で開発された品種はもちろん、点滴灌漑、総合的病害管理など最新の技術を取り入れて、農業生産工程管理（GAP）に沿って農産物を生産する。収穫後は、農場に隣接する加工場でパッキングして空港まで輸送するが、この間もコールドチェーンを保って品質を維持している。食品としての安全性を確保するために、生産段階までのトレーサビリティを保つシステムも取り入れている。ブラジルの食肉加工企業の場合は、輸出市場へはおもに原料肉としての鶏肉を供給しているが、国内市場では加工食品の製造やフードサービスまで参入している。

これらの農企業は、バリューチェーンの統合によって世界の食料需要とラテンアメリカの農畜産業を結び付け、農業・食料部門をこれからの成長産業に育てている。（清水達也）